

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



舞い上がる黄土が上空で季節風にのって、西日本に春の訪れを告げる黄砂となる（撮影：橋本紘二）

Contents

- 写真展ボランティア大募集！ P 2
- 夏のワーキングツアー予告 P 3
- 多様性のある森づくりへ P 4

2001.3

78

写真展ボランティア大募集！

JR京都駅で橋本紘二さん写真展『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』開催

写真報告『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』が、4月に京都で開催されます。橋本紘二さんが6年間取りためてきた大同の写真が、大きなパネルになって大迫力で展示されます。JR京都駅と便利なところですので、京都にお出かけの際はぜひお立ち寄り

写真集『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』いよいよ発売！

写真家の橋本紘二さんが95年から6年間大同にかよって撮り続けてきた作品をまとめた写真集が、3月下旬に発売されます。大判で見開きの写真が多く、迫力たっぷりです。その分お値段がはるので、買うのはちょっと……という方は、ぜひ学校や地域の図書館に購入希望を出してください。

『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』



ください。

また、写真の説明や写真集の販売にあたるボランティアスタッフを募集しています。大同に行ったことのない人でも、事前にガイダンスをおこないますので、興味のある方はGEN事務所までご連絡ください。

橋本紘二・東方出版・6,000円（税別）・A4変形版

GEN事務所でも取り扱います。送料はGENが負担して、6,000円でおわけします。ご希望の方は事務所までご連絡ください。

山仕事体験 木を伐って山をまもる

一度はやってみたかった山仕事を、あまがさき山仕事体験隊（ホームページ <http://www.eva.hi-ho.ne.jp/h-yasuda/index.html> メールアドレス h-yasuda@eva.hi-ho.ne.jp）のご好意で体験することができました。

1月13日、猪名川町の尼崎高原ロッジは底冷えがして、「うわあ、池の表面が凍ってるよ」などと言いながら裏山にむかいました。参加者はGENからのメンバーが約10人、体験隊のみなさんが約10人。のこぎりとなたを持って出発です。

体験隊では、ロッジの裏山の手入れをひきうけ、夏季を除く毎月第2土曜日にハイキングコース周辺の枯れ木や倒木処理、下草刈りなどをおこなって

●日時：4月1日（日）～8日（日）9時～20時

●場所：JR京都駅南北自由通路インフォメーションプラザ

※期間中のご都合のいいときでけっこうです。交通費の実費と、時間帯によって食事代1,000円を支給します。

いるそうです。小道に沿って、間伐、枝打ちで出た枝が積んであったり、切り株のイスが並んでいました。作業場所につくと説明を聞いて、さあ、作業開始！

細いヒノキとスギに囲まれて、ひょろりと伸びた山桜がありました。ヒノキとスギを伐れば桜が枝を伸ばせます。まず、ヒノキを伐ることにしました。なたをふるうのなんて、見ているだけなら簡単そうですが、実際にやってみるとなかなか狙ったところに当たりません。それでもなんとか受け口をつくると、今度はのこぎりです。もう倒れるかなと思ってからがはかどりません。小さな音を立てながら倒れたヒノキがちょっと気の毒でしたが、里山を維持するには必要なことです。

伐った木は枝を落とし、1mほどの長さに切ってじゅまにならないところに積んでいきます。午後からはチェンソーの音も響きました。直径20cmほどの枯れかけたマツが、メリメリと音を立てて倒れています。

慣れない道具をつかってすぐに腕が痛くなり、しばしば休憩をしながらでしたが、念願の山仕事体験を楽しみました。

（東川）

第7回会員総会のお知らせ

緑の地球ネットワークが1992年に準備会を発足してから、今年で10年目をむかえました。これまで中国山西省大同市で植えてきた木は1,190万本、面積が3,570haになりました。

今年から来年にかけて記念イベントも計画中ですが、まずは第7回会員総会があります。シンポジウムとあわせて下記の日程で開催しますので、どうぞご参加ください。会員以外の方でも

ご参加いただけますので、お気軽にどうぞ。会員の方には、あらためてご案内をお送りします。

●日時：6月16日（土）13時30分～16時30分

●場所：大阪市立弁天町市民学習センター（JR環状線、地下鉄中央線「弁天町」駅すぐ）

学習会 ストップ！ 地球温暖化 環境の世紀へ、変えよう！ キャンペーン

昨年のCOP6では、森林吸収の扱いなどで各国の対立がつづき、合意を形成することができませんでした。7月にポンでおこなわれる再開COP6では、どのような議論になるのでしょうか。

地球温暖化問題の基礎から、国際会議での争点、私たちの生活に直接関わる部分まで、わかりやすい入門的な内容を予定しています。ぜひご参加ください。

●日時：5月15日（火）18時30分～20時

●場所：大阪市立弁天町市民学習センター（JR環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅すぐ）

●講師：気候ネットワークから派遣（調整中）

●問合せ・申込み：GEN事務所まで

●締め切り：5月11日

●参加費：700円

GEN自然と親しあい会 野草をたべよう

新緑の季節、武庫川の流れに沿った福知山線廃線跡にはたくさんの野草が生えています。観察しながらちょっと採取し、桜の園でテンプラ、おひたしなどにして食べてみましょう。

●日時：5月19日（土）10時～15時頃

●場所：武田尾「桜の園」

●指導：立花吉茂さん（GEN代表・花園大学教授）

●集合：JR福知山線「武田尾」駅前午前10時

●持ち物：昼食、飲み物、敷物、メモ、ポケット図鑑など。歩きやすい靴でご参加ください。

●参加費：500円（保険料を含む）

●申込み：5月16日までにGEN事務局まで

※「桜の園」—在野の桜研究家として有名な笠部新太郎の約70haの演習林跡。「武田尾」駅から約5分。



こんなものを
集めています！

●使用済みテレfonカード

キズや汚れ、折れ目のないテレカを回収しています。裏表をそろえ、輪ゴムでまとめるなどしてお送りください。

●未使用のテレfonカード

ご家庭で眠っている未使用のテレカがあればお送りください。

●書き損じハガキ

書きまちがえた年賀状や暑中見舞いなどが汚い出しの奥に眠っていますか。古いものでもけっこうです。古切手は対象外です。

●商品券

半端に残ったり、使うあてのない商品券があれば、お送りください。

●未使用の文具

大同の学校へのおみやげにします。未使用の新品にかぎります。

●未使用の不要な贈答品

タオル、石けんなどの贈答品で、使わないものをお送りください。フリーマーケットなどで販売します。

出発せまる！

春の黄土高原ワーキングツアー

春の黄土高原ワーキングツアーのシーズンがやってきました。今春は全部で5つの団が大同を訪れます。

先頭をきって出発するのはGENのワーキングツアー（総勢38名）で、3月25日から4月1日まで。さらに4月6日から11日まで全ジャスコ労組、8日から14日まで全国都市下水協、15日から20日までOFS（東京ディズニーランド労組）、20日から27日まで東北電力総連とつづきます。

つぎつぎとやってくるツアーのメンバーを迎える大同事務所はたいへんですが、少しでも多くの方に黄土高原の状況をしっかりと見ていただきたいと思います。

2001 夏の黄土高原ワーキングツアー予告

春のツアーは早くから申し込みが届いて、締め切りの20日以上前にいっぱいになってしまいました。夏のツアーの募集開始は5月ですが、参加をご希望の方は早めに日程を調整して、GEN事務所までご連絡ください。

●日程：7月26日（木）～8月2日（木）

●費用（変更になる可能性があります）：一般=19万円、学生=18万

円（国際航空運賃、中国国内での交通費／食費／宿泊費、ビザ取得手数料、GEN年会費ふくむ）※中国国際航空利用 ※関西国際空港発着 ※成田空港発着の場合は航空運賃の差額分高くなります。※北京もしくは大同で合流ご希望の方はご相談ください。

●定員：30人（先着順）

◇中国映画紹介◇ 山の郵便配達

1980年代初頭。中国湖南省の険しい山岳地帯で長年郵便配達をつとめ、足を痛めて引退する父のあとを、息子が継ぐことになった。息子にとっては初めての、父にとっては最後の、3日がかりの配達行がはじまる。家をあけていることが多かった父に隔たりを感じていた息子が見たものは……。

「山の郵便配達」は99年、「あの子を探して」をおさえて中国のアカデミ

ー賞といわれる金鶲賞
作品賞を受賞しました。

中国ではめずらしい縁したたる湖南省山岳地帯の豊かな自然を背景に、少数民族・トン族の暮らしもまじえながら、淡々と親子の心の交流を描いた一編の詩のような作品です。

（原題「那山 那人 那狗」93分）

【上映スケジュール】

<東京>4月7日から岩波ホール

<関西>5月中旬からOS劇場CAP

<中部>6月名古屋ゴールド劇場

多様性のある森づくりへ

靈丘自然植物園と「カササギの森」

高見 邦雄 (GEN事務局長)

私たちの緑化協力は1998年を境に内容的に大きな変化があったと思います。その年の夏、大同市最南部の靈丘県で、いくつかの自然林を確認したからです。2000年8月、日本の専門家と現地の技術者とで、靈丘県狼牙溝郷の納土山で植生調査を実施しました。まずはその報告から。



村から遠く離れたところに自然林がのこっている

◆調査現場にたどりつくまで

調査は難航をきわめました。専門家が靈丘に到着する前日の8月7日、現地の技術者と私たちスタッフ数人で下見をおこないました。現場にいちばん近い村、狼牙溝郷二嶺寺村まで、靈丘の県城から車で3時間余ります。途中にいくつか危険な所がありました。川

原を2時間余り歩いて自然林に到着しました。谷底を水が流れたり、伏流水になつたりしています。調査とキャンプの場所を決め、帰りはより安全と思われる河北省阜平県回りにしました。こちらも車で

3時間ちょっとです。

翌日は、残念なことに雨で（農民は大よろこびです）、私たちは近くの山で植物をみました。夜になって、下見に使った2つのルートとも雨で通行不能になったことがわかりました。

しかたがないので、上寨鎮納土台村を経由する別ルートを使いました。納土台村は公道に面し、村までは簡単ですが、そこから納土山までは高低差が750m、アップダウンが急で、急ぎ足で片道3時間半かかりました。ガードの公安警察官をはじめ、中国側同行者の半数以上が途中で脱落しました。

こんなことを長々と書いたのは、交通が不便で、村から遠いところにしか、自然林なんて存在しないことをわかってもらいたいからです。

納土山（海拔1,700m）の山頂から周囲をみると、林があるのは北向きの日陰斜面（中国語で陰坡）だけで、南向きの日向斜面（陽坡）は草と灌木だけ

です。大同のような乾燥地ではどこもそうで、木を植えるときもできるだけ北斜面を選びます。

◆自然林調査を実施する

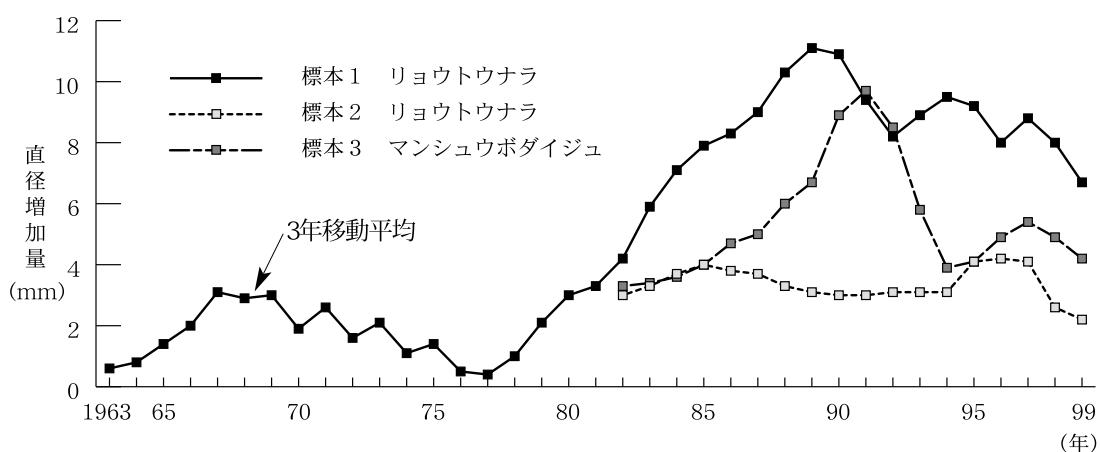
日帰りの強行軍のため、10m×15mの調査プロットを2つ、ポリヒモで囲い、そのなかの樹木を調査しました。これらの林は遠目にはびっしり茂っていますが、なかはそんなに密ではなく、樹冠のすきまを通して空がみえます。それからみても、まだ若い森林なのでしょう。

プロットAの中心になっているのは、マンシュウボダイジュ（糠椴）で、ほかにはイタヤカエデの一種（元宝槭）ヤエガワカンバ（黒樺）、リョウトウナラ（遼東櫟）がわずかにまじっています。

プロットBは大部分がリョウトウナラで、あとは数本のカエデがあるだけ。Aには灌木も草もほとんどありませんが、Bにはけっこう生えています。30mほどしか離れていないのに2つのプロットの樹木はかなりちがいます。林床には落ち葉がたまり、その下は黒い森林土壤でした。

プロットBのリョウトウナラ2本（標本1：樹齢39年、樹高8.0m、胸高直径14.8cm、標本2：樹齢20年、樹高5.5m、胸高直径5.6cm）プロットAの

納土山自然林標本の直径の経年変化





自然林にはかなり大きなマンシュウボダイジュもある

マンシュウボダイジュ1本（標本3：樹齢20年、樹高8.4m、胸高直徑0.8cm）を伐採し、標本をとりました。根元の直徑の増加量をグラフにすると、興味深いことがわかつてきました。

◆調査からわかったこと

標本1のナラが最初の10年近く、順調に生育したのは、周囲がオープンな環境にあったからでしょう。その後、周囲に樹木が茂って陰になったのでしょ、生育が落ち込んで、70年代末にはほとんどストップしました。根元の直徑が3.1cmになるのに17年もかかっていました。

そのあと、また急に太りはじめます。おそらくこのとき、村の人たちがやってきて、木を伐ってタキギにしたのでしょう。それを裏付ける切り株も残っていました。難を逃れたこのナラは、日当たりがよくなつて、ふたたび生育をはじめました。標本2のナラ、標本3のマンシュウボダイジュは、そのころ発芽したものでした。それから20年余りをかけて、この林は自然に再生してきたのです。

その後、この森林に人手が入らなくなつたのはなぜでしょう？ 答えは現場でみつかりました。納土山のふもとに、60年代に植林されたアブラマツの林があり、それより上にはカラマツが植えられています。それらの木は下枝がみごとに切られています。人工植林のマツの枝が燃料として使えるようになったため、片道に何時間もかかる山の上まで、タキギをとりにくる必要がなくなったのです。マツによる人工造林が、回り回って、このような自然林を再生させたのです。

◆落葉広葉樹は役立たない？

いまこの地方で大々的に植えられているモンゴリマツ（樟子松）やアブラマツ（油松）にくらべ、水土の保持効果はこれらの落葉広葉樹のほうが高いはずです。また緯度で10度も北から導入されたモンゴリマツより、ここに自生する樹種のほうが病害虫などにたいしても

安心できます。にもかかわらず、この地方で、これらの樹種が注目されることはありませんでした。地元の技術者にそのことを話して、「役に立たない」と一言で切り捨てられたことがあります、そんなはずはありません。

北京の西郊外にある北京林業大学演習林には、マツ、コノテガシワなどの針葉樹にまじって、モンゴリナラ、リヨウトウナラ、アベマキなどが生えていました。50年代末に人工的に植えたものだそうです。コノテガシワなどに虫害が発生し、枯れるものが増えていて、これらは問題がなく、天然更新もはじまっています。しかし、この技術者たちも、「冬でも青いほうがいい」などといって、関心をもとうとしません。困ったことです。

◆自然の力を生かした森林再生を

もう一つ注目すべきことが納土山にはありました。ふもとのマツの林の中に、マンシュウボダイジュやリヨウトウナラの若木や小苗が生えてきています。もちろん人手で植えたものではありません。山頂近くの自然林から、なんらかの自然の働きで種子が運ばれてきたのでしょう。調査に参加した北海道大学演習林の浪花彰彦さんが、「あのような働きを重視すべきです。人間が人工的に植えるのは下策であって、自然の力で緑が再生するのがいちばんいいのです」とメールをくれました。四手井綱英さんの同じ意味のことばを最近、新聞紙上でみました。

◆放牧をどうするのか

生活燃料のための伐採とならんで森林の成立を妨げているのは、ヒツジやヤギの放牧です。納土山に登る途中で



も30頭ものヤギの集団が、先を争つて草や樹木を食べていました。被害が深刻なのはエサが不足する春先で、草や樹木の芽生えはもちろん、根っこまでかじってしまいます。

靈丘自然植物園で99年春から放牧を排除したところ、急速に緑が濃くなりました。雑草の丈がずっと大きくなり、種類もずいぶん変わってきました。従来はキンポウゲ科を中心とする有毒植物と有刺植物だけだったのに、ウマゴヤシやハギなどマメ科の植物も増えました。放牧が植生に与えるストレスの強さが、このことからもわかります。

99年冬に緑色地球網絡大同事務所と共同で実施した農村のアンケート調査によると、農家1戸あたりの家畜頭数は1.7頭です。それを放牧専業農家が集めて100~300頭の集団にして、収穫の終わった畠、荒れ地、山などで放牧します。ヒツジ1頭は200元ほど、ヤギはもっと安価ですから、農家が放牧できる収入はわずかなものです。しかし、環境が悪く、農耕による収入の少ない村ほど、放牧に頼る割合が高くなります。放牧は、環境破壊と貧困の悪循環の典型的なあらわれです。

大同市青年連合会の祁学峰主席は、兼務する大同市人民代表大会の会議で、緑化にかんする7項目の提案をしたそうですが、その1項目は「あまりに条件の悪いところは住民の移住を検討すべきで、とくに自然林のそばの村は村ごと移転を考えたほうがいい。そうすれば自然に森林が再生する可能性が高い」というものです。

◆「退耕還林」をすすめる中国政府

中国政府がすすめる西部大開発のなかで、「退耕還林」が強調されるようになりました。傾斜角が25度を超える急斜面をはじめ、条件の悪いところでの耕作をやめ、森林や草地に返そうというものです。対象となる農家には、数年間、政府が食糧を補償することになっています。それとあわせて、タキ

ギを代替する燃料の補償、放牧の禁止もしくは制限とそれに換わる小さな産業の育成などで、森林を再生する条件はずいぶん広がるでしょう。

◆大同の緑化のイメージ

これまで述べてきたことを総合すると、ここでの緑化の全体像はつぎのようになります。黄土丘陵や山地など荒廃地の緑化は、従来どおり瘦せ地に強いマツを中心とし、ヤナギハグミ（沙棘）、ムレスズメ（檉条）、ハギ（胡枝子）などを混植します。南部の靈丘県などでは、シラカバやハシバミなどカバノキ科の樹木を利用することもできます。これらの森林は、10年余りもたてば、農村に燃料を供給するとともに、土壤を肥やし、つぎの世代の樹木が育つ条件をつくるでしょう。

リョウトウナラ、モンゴリナラなどはこの地方に自生しており、長い目でみれば重要な役割をはたすでしょうが、いま、いきなり植えても育つとはかぎりません。苗木の供給もまにあいません。これらの樹種は、小面積でいいので、比較的条件のいいところを選んで育てておくのがいいでしょう。林業関係者を含め、この地方の大部分の人たちがその存在を知りませんので、モデル林をつくってその有用性を認識してもらうとともに、種子の供給源を確保する必要があるからです。

靈丘自然植物園では、リョウトウナラをはじめ、近くの自然林で採取した種子をつかって、たくさんの樹種の育苗を開始しています。敷地内の上のほうには、リョウトウナラなどの若木がたくさん生え、自然に森林が再生しつつあります。こうした作業と調査を継続するなかで、大同市南部の山地における森林再生の道筋はより鮮明になるでしょう。

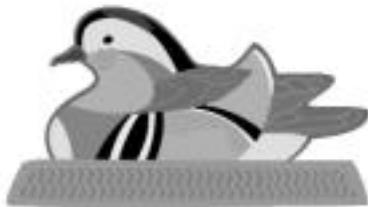
大同市北部の黄土丘陵は、条件が異なります。ことしの春からスタートするカササギの森（大同県聚樂郷）は、広さが600haあって、敷地内にはいろんな条件のところがあります。靈丘植物園や環境林センターで育てたさまざまな樹種を、その一角に試験的に植えていきます。従来からの課題であつた、草や灌木を先に茂らせて土壤改良

し、その後に樹木を植える、といった方法も実施します。

◆見えてきた道筋

緑の地球ネットワークの大同における緑化協力活動は10年目にはいっています。1992年にこの活動を開始したときはシロウトだけの集まりで、気持ちはあるても、すすむべき方向はみえていませんでした。94年から日本の専門家の積極的な参加があり、その調査と研究をつうじて、たくさんのがわかつてきました。靈丘植物園やカササ

ギの森はその成果であり、今後につづての飛躍台ともなることでしょう。



“カササギの森”にご参加ください！

今春からいよいよ、“カササギの森”が本格的にスタートします。作業小屋や貯水槽、作業道といった施設をつくり、また、ワーキングツアーのメンバーが訪れての作業もあります。少しずつ、GEN独自の林場がかたちになります。

従来の地球環境林と小学校付属果樹園という植林は、土地の使用権も植えた木の権利も村にあります。村の緑化にGENが協力したかたちで、それがGENの緑化協力の特長でもありました。でもそれでは、たとえば「草を茂らせてから木を植える」といった緑化の方法はつかえません。

だんだん技術が伸びてきて、いろいろな方法を試してみたくなつた大同の技術者たちから「自前の林場がほしい」という声があがりました。また、日本の会員からは、以前から「ツアーのたびに訪れて成果を確かめられる場所がほしい」という声がありました。そこで“カササギの森”計画が動き出したのです。

大同県聚樂郷で、約600haの土地の50年間の使用権を購入しました。谷底には小さな流れがあり、ポプラやヤナギハグミ（サージ）が自生しています。高いところは標高1,400mほどあり、カラマツを植えることもできそうです。ここなら、放牧を排除してまる1年

間草だけを生やしておくことも、太行山に属する靈丘自然植物園からもってきた落葉広葉樹の種子をまいて、試験栽培することもできます。大同一帯の緑化にもちいる造林樹種の多様化への、自然植物園につづくふたつのステップです。

この“カササギの森”に参加してくださいの方が順調に増えています。たくさんの方の参加をお待ちしています！

● “カササギの森”協力方法

- ・1口5万円単位（1haあたりの苗木代、労賃、5年間の管理費など）で、「カササギの森」と明記して下記の口座あてにお送りください。
郵便振替 00940-2-128465
加入者名 緑の地球ネットワーク
- “カササギの森”に参加すると……
 - ・記念のため現地に協力者の氏名を書き入れます。
 - ・協力者証をお送りします。
 - ・成育状況を5年間写真で報告します。



12月の“カササギの森”。谷底にはポプラや灌木がみられる

植物を育てる (10)

立花 吉茂 (GEN代表・花園大学教授)

●里山と休耕田

農耕のはじまる以前の日本の自然

針葉樹林帯…北海道の東北部…エゾマツ・トドマツ・ハリモミ・ツガ・トウヒなど。

落葉樹林帯…北海道の西南部～東北地方～中部山岳地帯…ミズナラ・ブナ・ハリギリ・ケヤキ・ニレ。

照葉樹林帯…中部地方以南(西)…タブノキ・スダジイ・コジイ・アラガシ・イチイガシなど。

縄文・弥生→農耕のはじまる→海岸から河川の流域に農耕をはじめる。渡来人の増加、食糧の安定供給から人口増加→河川流域から周辺の平坦地の森林伐採、焼き畑、開墾、農地化(5000～800年前)。

さらに人口増加→傾斜地の森林伐採、焼き畑、開墾、農地の拡大→水田耕作はじまる(1000～1500年前)。

新田の開発→棚田もできる→二次林の里山化。土地制度、世襲制など(江戸時代)

硫安の開発→多肥料化→反当収量の増加、里山全盛時代(明治、大正、昭和)。化学肥料多用→燃料革命→農業の衰退→飽食時代→休耕田発生→里山放棄→

現在。

現在の植生はどうなっているのか?

- a) 5%以下(原生林)…高い山の頂上付近、東北・北海道に残っているだけ。
- b) 40%はスギ、ヒノキの植林地……手入れされた植林地はきわめて少ない。
- c) 30%が二次林(かつての里山)…ごく一部が里山として使われている。
- d) 25%が各種保安林……準自然林、遷移のすすんだ二次林など。

現在どこも手入れがおこなわれず放置されている。このまま放置されると、a)はそのままで遷移し、b)は台風などにより崩壊し、水害などを引き起こすが、全滅後には遷移がはじまって50年くらいで二次林となる。c)はアカマツが減少してじょじょに原生林に遷移はじめ、100年くらいで常緑樹が優勢な森林にもどるであろう。遷移が終わって照葉樹林や落葉樹林に戻るにはさらに20年を要する。d)は二次林よりやや早く原生林に戻るであろう。

以上は人間がいっさい手を加えない

とこのようになると予測される。

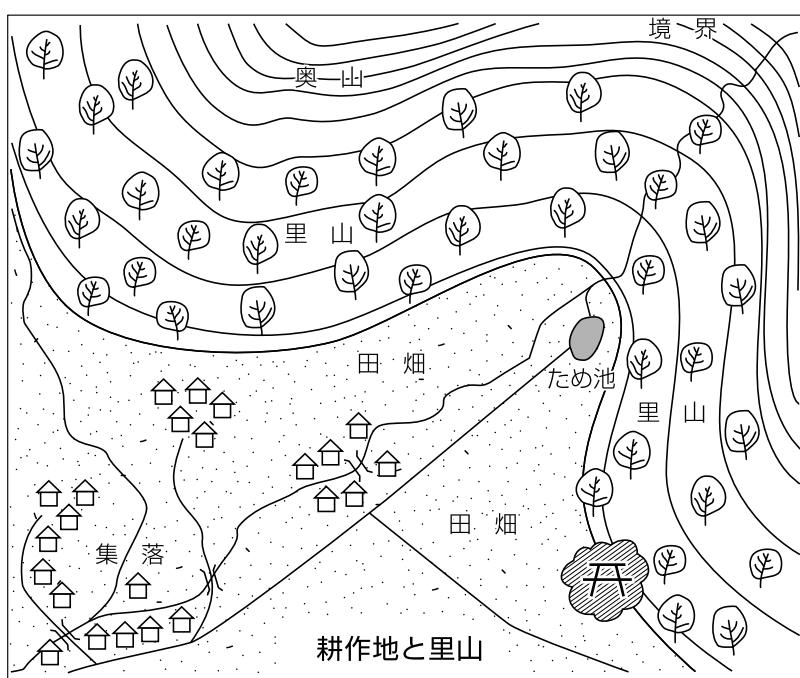
山間部の田畠はどうなる?

いまの経済状態がつづくと仮定すれば、棚田や小さい水田や山の畠は放棄され、二次林に移行してゆくであろう。現在の小面積の田畠は、食糧輸入がつづくかぎり採算がとれず、老人たちが農耕不可能になれば、次世代に移つてから放棄されることになる。大面積の農耕地はとりあえずJA(農協)などが管理するであろうが、山里には大面積の大型農業機械のつかえる場所はほとんどないから放棄せざるを得なくなる。

休耕田は管理にめんどうな場所や、小さい田、自宅から遠い田、水の引きがたい田などが当たられるから、放棄されるのはまずこのような田からである。

休耕田の活用方法

休耕田は3年以上放置すると、宿根草が深く根を下ろし、水田に復活させるのに多くの手間が必要になる。さらに、5年以上も放置すると復活不可能になってしまう。これを防ぐのには、水田状態に水を張ってなにも植えないでけばいつでも水田に復活することができる。水を張ると水田雑草が生えてくるがこれらは根が浅く、取り除くのが簡単である。また、化学肥料や除草剤などの農薬が散布されないから、自然が回復され、トンボや各種の昆虫、水生植物、水生生物、小鳥や水鳥などが復活し、ドイツでおこなわれているビオトープなどよりもはるかに豊かな日本の自然が復活できて一石二鳥である。そのうえ、干ばつの年にはこの水を利用することもできる。





環境省発足記念
環境省と21世紀の環境行政
～川口環境大臣と語る
タウン・ミーティング～

川口順子環境大臣にがつんとひとこと
と言えるかもしれません？

- 日時：3月24日（土）14時～16時
- 場所：大阪国際会議場（大阪市北区
中之島5-3-51、TEL 06-4803-5555）
- 参加費：無料
- 定員：500名（先着順）
- 申込み：氏名、職業、住所、電話・
FAX番号、メールアドレス、質問・
意見を明記して（財）水と緑の惑星
保全機構（TEL. 03-3503-7743
FAX. 03-3500-3841 e-mail:
mizumidori@gea.or.jp）まで。

中国の地球温暖化問題に
関する研究会

中国国家環境保護総局局長顧問の張
坤民氏、東大工学部の定方正毅教授ら
を話者にむかえ、中国の温暖化問題と
環境協力を考えます。

- 日時：3月24日（土）13時～17時
- 場所：京大会館210号会議室（京都
市左京区吉田河原町15-9、京都駅よ

り市バスD2のりば（206）四条京
阪より（201）（31）京大正門前下車）

- 共催：環日本海アカデミック・フォ
ーラム、環日本海地域環境研究会、
京都大学経済学会
- 参加費：500円
- 定員：80名（要申込み）
- 問合せ・申込み：環日本海アカデミ
ック・フォーラム事務局（担当 京
都府企画環境部企画参事付 鈴木）
TEL. 075-414-4341 FAX. 075-414-
4363 e-mail: acdfo@mail.joho-
kyoto.or.jp
- ※終了後、交流会があります（参加費
2,000円）。

環境の世紀へ、変えよう！ヤハーン
ひと声アクション

私たちの声を世界へ！
～COP6再開会合へ届けよう！～

昨年のCOP6では「化石賞」という
不名誉な賞をもらってしまった日本。
今年7月に開かれる再開COP6では、地
球温暖化防止への積極的な姿勢を示し
てほしいものです。

この“ひと声メッセージ”は、気候
ネットワークが6月に東京で開催する
集会と7月のCOP6の会議場で展示し、
日本政府や世界各国にアピールします。

日本政府への要望、再開COP6への
期待など、自由に書いてください！

【e-mailで送る】

“ひと声メッセージ”に、できれば

お名前、ご住所をそえて<kikonet@
jca.apc.org>までお送りください。

【郵便で送る】

はがき大の紙に“ひと声メッセージ”
を書いてお送りください。絵もOK。

[送り先] 〒604-8142京都市中京区
高倉通四条上る高倉ビル305 気候ネ
ットワーク・メッセージ係

- 問合せ：キャンペーン実行委員会事
務局（気候ネットワーク気付）TEL.
075-254-1011 FAX. 075-254-1012、東
京・TEL. 03-3263-9211 FAX. 03-
3263-9463、ホームページhttp://
www.jca.apc.org/~kikonet/index-j.html

ブンタンをどうぞ

高知の田中さんから、ご案内です。

- 土佐文旦（低農薬、有機栽培）

A	5kg	3L	8~9玉	3,500円
B	5kg	2L	10玉前後	3,000円
C	5kg	L	12玉〃	2,500円
D	5kg	M	15玉〃	2,000円

（10kg箱も用意しております）

- 出荷：4月上旬まで

- 送料別途：関西630円、関東840円

- ★ご注文は田中隆一さんまで

〒781-7412 高知県安芸郡東洋町甲浦
TEL./FAX. 0887-29-2500
e-mail : r-kei@md.neweb.ne.jp

- ★売り上げの一部をご寄付いただいて
いますので、ご注文の際は「GENの
紹介」とひとこと添えてください。